Ⅱ

課題研究部会のあゆみ

課題研究部会

読解力（汎用的な資質・能力）の育成について　～2年次～

Ⅰ　はじめに

本市において小６・中３ともに「読むこと」に課題があることが明らかになっており、昨年度より中学１年生を対象にリーディングスキルテスト（以下 RST）を行い、講演会と課題研究部会（２回）を開催し、RST の理解を深めてきた。今後も更に取組みを進め、授業改善による実践を積み重ねていきたい。

また、児童生徒が「分かる」「できる」授業づくりをしていくためには、教科の枠を越えて読解力を育成することは、各校の共通の課題であると考える。

そこで、昨年度に引き続き、上記テーマを掲げて研究し課題に対応していく。

Ⅱ　研究の進め方

１　テーマ　　読解力（汎用的な資質・能力）の育成について

２　組　織　　各校１名以上の代表者計１６名で構成

３　内　容

（１）　RST の受検（中学生）

（２）　全体講演会…オンラインで全所員対象

（３）　課題研究部会の開催…２回

１回目…読解力の理解についての演習、実施計画の作成

２回目…実践事例の交流

Ⅲ　研究の概要

１　第１回研究部会

（１）　日時・場所　　令和５年６月７日（水）１４：４５～１６：４５　　三泉小学校

（２）　内　容　　講話「リーディングスキルを活用した授業づくり」

講師：目黒 朋子 氏（教育のための科学研究所　上席研究員）

読解力を育むための授業づくりについて、RST 分析により全体傾向を把握し、一斉授業でどのように取り組むかという内容で第１回課題研究部会を行った。

以下は講話の概要。

○　小中の定義文の量を比較すると、中学校では３～４倍になる。読み解いていくことが困難になるため小学校の段階から読解力の育成に取り組む。

○　リーディングスキル（以下 RS）を活用した授業づくりは、子どもの教科書読解には個人差があることを前提にし、６分野７項目を使って「読み」の凸凹をなくし、教科書の内容理解のレディネスをそろえること。

○　RS を活用した授業づくりのポイントは、教師自身が「解像度」を高くして教科書を読むこと。

○　５つの取組みから RS を育む授業をつくる。

・読みへ寄り添う

ねらいを考えずに、子どもと同じ気持ちで問題に向う。「同じ」見方や考え方に気付かせる。

・共書き

授業の要点を授業者が読み上げ、それを聞いて子どもたちがノートに一斉に書き写す活動をする。子どもたちが書き始めるのと同時に授業者も黒板に書く。

・指さし

書かれている部分を理解し、大切な部分をフォーカスする。

・答えは文章

係り受けの関係（主語・述語、修飾語・被修飾語）を意識する。質問と答えの整合性を大切にするため「～から」と答える。

・データを言語化

2　第２回研究部会

（１）　日時・場所　　令和５年１２月１３日（水）１５：００～１６：４５　　三泉小学校

（２）　内　容

子どもが自ら学び取る教育の一つの形である「情報の収集、整理・分析」には、文章を正確に読み取る「読解力」が必須であることを確認した。そして、各学校と各自の「読解力」を育む授業づくりの実践について情報交換を行った。

【情報交換の方法】

①　情報の収集、整理・分析

・各自、実践を見比べ、交流したいことを考える。

②　自由交流１

・①の活動を基に、交流したい相手を自由に選び、情報交換

・話題にしたい視点の検討

検討された視点　「読書と作文で育てる読解力」「読解力→表現→単元構成」「校内での取組み推進」「教科書の活用（学び方）」

③　自由交流２

・視点について、交流相手を自由に選び、情報交換

Ⅳ　おわりに

今年度の市内中学１年生のRSTの結果、全ての項目において平均値を大きく下回り、生徒の教科書読解力には個人差があることが分かっている。また、私自身がRSTを受検し、６項目（係り受け解析・照応解決・同義分判定・推論・イメージ同定・具体例同定）における自分の実態を把握してみると、「基本的な意味をつかめています。よく読める文と不得意な文に差があるようです」など、自分にも課題があることに気付いた。同時に、私と同じように受検し、課題に気付いた教師がいることには驚きを隠せなかった。教師にも読解力について課題があるという実態と市内中学１年生のRSTの結果より、検査をしていない他の児童・生徒にも読解力の課題があると捉えてもおかしくない。今後も、小中共に読解力を育む授業改善を継続する必要があると考える。

（佐藤　匡一）

個 人 研 究 の 紹 介

学校名	寒河江市立寒河江小学校		
職　名	教　諭	氏名	三　浦　将　紀
主題名	子どもたちの可能性を引き出す「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指して ～これからの教師の役割と一人一台端末の扱い～		
研究のねらい	「令和の日本型学校教育」の構築のために重点とされているのが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の往還である。そのような学習を進めていくにあたり、教師が果たすべき教育的役割や一人に一台配置されたタブレットＰＣ端末の効果的な扱い方について、PBL（Project Based Learning）の実践を通して検証していく。		

学校名	寒河江市立寒河江中部小学校		
職　名	教　諭	氏名	井　上　　崇
主題名	郷土愛を育む社会科授業実践～６年歴史単元「結髪土偶」の事例から～		
研究のねらい	本校学区から出土している「結髪土偶（縄文時代の遺物）」を題材に、社会科授業を実践することで、歴史学習についても、探究的な学びができることをイメージできるようにする。また、保存・修繕・展示のために多くの人が関わっていることを知り、結髪土偶の大切さを考え、郷土について理解を深めていくことができるようにする。		

学校名	寒河江市立寒河江中部小学校		
職　名	教　諭	氏名	髙　橋　千　穂　　兼　子　梨　緒
主題名	たくましく学ぶ子どもの育成～一人一人の子どもの力を伸ばす教師のアプローチ～		
研究のねらい	本校には、20 代 30 代教員で構成した勉強会「夢中部」がある。夢中部職員を中心に、一人一人の子どもの力を伸ばす方法について議論し、実践することで、どのように子どもたちの力が伸びたのか、成果と課題を明らかにする。		

学校名	寒河江市立高松小学校		
職　名	教　諭	氏名	井　上　　桜
主題名	小学校の外国語活動・外国語科における発達段階に応じた音声指導の提案		
研究のねらい	昨年度は「小学校外国語活動・外国語科における効果的な音声指導の在り方」というテーマのもと個人研究を進め、実践をまとめた。今年度は昨年度の実践を生かし、外国語活動・外国語科の授業において長期的にフォニックスを導入する。児童の外国語学習に対する情意面や４技能５領域の学びの変容を見取り、発達段階における音声指導の進め方とフォニックスの効果について検証していく。		

※　個人研究の詳細につきましては、別冊の『私の教育実践 第２７集』をご覧ください。